子どもたちの音楽の楽しみ方

山田　陽子

私は現在四年生（女子二名・男子四名）をN先生と担任しています。クラスの子どもたちは日々の生活の中で、それぞれのやり方で音楽を楽しんでいます。共通しているのは、どの子どもも音楽を通して周りの子どもや大人たちとつながっていくという側面をもっていることです。時にはつながることを目的として、音楽を利用しているようにみえることもあります。このことは私についても言えることです。今回私は、私が子どもたちとの関係の中でとらえた、子どもたちの音楽の楽しみ方についてお話ししたいと思います。

歌ってもらう

A君の場合　A君は一日の内で数回「まつぼっ」と、『まつぼっくり』の頭の部分を私やN夫先生に歌いかけてきて、こちらの顔をじっとみつめます。私たちは

「くりがあったとさ」というふうにつなげて歌います。私たちがそうできない時、A君は再度「まつぼっ」と催促します。そして私たちが歌うのを満足そうに聴いています。私はA君がひとりで最後まで歌っているのを聴いたことがあります。A君は自分に気持ちを向けて欲しいときに求めているようです。自分の好きな歌を親しい人に歌ってもらうことで、学校での自分の存在を確認しているのかもしれません。私は「あなたのこと見てるわよ」という思いを伝えるために、このやりとりを大切にしています。

T君の場合　T君のお気にいりの歌は『にこにこぷん』です。T君が発作の後や体調が悪くて横になっている時、私は「応援しているからね」という思いをこめて歌うことがあります。するとT君はまじまじと私の顔を見てうれしそうにします。「大丈夫だよ」と私を元気づけているように感じています。

D君の場合　D君はレールあそびに凝っていた時期があります。私は彼が、自分の世界に閉じこもるためにこのあそびに没頭しているように見えることがありました。それで私はD君と一緒に楽しみたいと思っていることを、押しつけでなく自然に伝えようと機会を待っていました。その頃の彼は他の子どもにレールや電車を触られるのが嫌で、泣きだすことが度々ありました。そんなD君の気持ちを支えようと、即興で「脱線、脱線、だっせーん」と歌ってみました。それが彼にうけて、自分でわざわざ脱線させて「脱線の歌、歌って」と要求するようになりました。そのうち私は修理や工事の歌も請け負うようになりました。

リズムを合わせる

Sさんは入学してから二年生の後半まで、私を見ながら壁や太鼓を手で大きく響かせて叩いては、それと同じリズムで叩くことを繰り返し要求してきま

した。Sさんはそうやって、私が自分の期待に応えてくれる相手かどうかを見極めようとしているようでした。また、まず自分のリズムを提示して、それに私が合わせる形でリズムを共有することで、自分の存在を守りながら私とつながりを持とうとしているようにも感じていました。現在はSさんの好きな歌を一緒に歌うことに移行しています。このところ、S君が太鼓やテーブル等音の出るものを叩いてあそんでいます。彼は難聴の診断を受けています。以前からS君は、嬉しいときに寝転がって足で床をリズミカルに打ち鳴らしています。今回は自分でリズムをとるのを楽しんでいるようすです。私はS君とリズムを合わせることを楽しみたくて、Sさんの時のように彼の後に続きます。ある日、S君とSさんと私が一緒にいる時、S君が太鼓を叩いてきました。私がそれを受けて叩くと、Sさんも照れながら、同じリズムで叩いてきました。S君はリズムを変えたりしました。少しの間でしたが、三人で目を合わせてニヤニヤしながら叩きあいました。

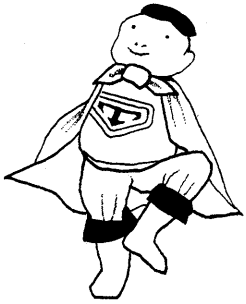
リズムに合わせて揺らしてもらう

Sさんの家庭での様子をお母さんが話してくださった時に、両手両足を持って揺らしてもらうあそびが好きでよくやっているということでした。さっそく学校でもやると大受けでした。このあそびは学校でも定番という感じで、好きな子が多いです。ホールでやるとその都度数人の子が参加します。NさんやD君はハンモックのようにタオルケットに入ってやります。お母さんのお腹にいた頃の感覚を蘇らせているようにもみえます。歌は「イカ焼きイカ焼き焼けたかなあ……」です。その子の願っていると思えるリズムで揺らしながら歌います。揺らす大人はふたりが殆どですが、時には四人だったりします。子どももひとりが殆どですが、一度に二、三

人入ったり、大人も一緒に入ったりすることもあります。そうなると持ち上がらなくて引きずる感じで揺らすことになるのですが、これもまた愉しいのです。このあそびには、揺れている子どもと揺らしながら揺れている大人がリズムを合わせる心地よさがあります。最後に「もう焼けた」と歌って、くすぐられるおまけがついています。大人も子どももキャーキャー言いつつ、このあそびを楽しんでいます。

自分の好きな歌を周りに広げていく

ある朝、Sさんは登校するやいなや、いつものように「おうた（さあホールでピアノを弾きながら一緒に歌いましょう）」と私を誘いました。最近のSさんのお気に入りは「友達讃歌」です。彼女が口ずさみ始めたのであわてて練習しました。Sさんは歌が大好きでお家や車の中でテープをよく聴いていますが、お母さんはこの歌を知りませんでした。私も彼女の前で歌った記憶がありません。そういう意味でこの歌はSさんが自分でみつけてきた歌なので、私もお母さんも大喜びです。私たちが歌っていると、SさんとA君のお母さん、実習生さんが集まってきました。私たちは声を合わせて歌うことが楽しくてやめられないという感じで、繰り返し歌いました。傍らを通るスタッフも、「朝から楽しそうね」と声をかけてくれました。別の日に私がクラスにいると、ホールからこの歌をS夫先生が何度も歌う声が聞こえて



きました。私は単純に「へー、S夫先生この歌好きなんだあ」って思いながら覗くと、トランポリンにいるSさんと一緒に歌っていたのでした。S夫先生はこの時から、Sさんが自分のことを認めてくれたように感じているそうです。ホールでSさんと私が歌っていると、昔は子どもの「お髭をはやした」I夫先生の口笛が加わることがあります。通りがかりに口ずさんでいくスタッフもいます。「小さい頃この歌好きだったんです」と懐かしそうに歌うお母さんもいました。A君やNさんもさっそく自分たちの持ち歌にしています。このようにSさんの好きな歌が周りに広がっていくことと、Sさんの世界が広がっていくことが重なって感じられました。

音楽仲間になる

A君・Nさん・Sさんは毎日のように、クラスルームの隣りのホールにあるピアノで、自分たちの好きな歌を弾いて欲しいと要求してきます。おもしろいのはこの内の誰かの要求に応えて弾いていると、他の二人が必ずと言っていい程、音を聞きつけて集まってくることです。A君の場合は姿は見えない時でも、ピアノに合わせた手拍子と足拍子が少しずつ大きくなってきます。三人が集うとにぎやかです。体がひとりでに動きだすという感じで、走ったり・ギャロップしたり、トランポリンでジャンプしたり・体を揺らしたり、両腕を大きく動かして弧を描いたりします。自分の足の裏や相手の膝や背中を叩く等、体が楽器に早変わり。これらの動きを三人三様でやっている時もあれば、相手のやっていることを一緒にやりだす時もあります。最近Nさんは曲のリズムに合わせて、ハーモニカを吹いています。メロディーは自由に付けているのですが、私にはハーモニーを楽しんでいるように聞こえます。歌は最初から最後まで歌詞どおりに歌ったり、声を出さ

なかったり、一部を歌ったり、「な」で歌ったり、子どもによっても、曲によってもさまざまです。私もピアノを弾きながら歌います。子どもの声が実際に聞こえなくても、一緒に歌っていると感じます。

自分の好きな歌と相手の好きな歌を知る

最近、「歌なら何でも好きよ」という感じだったSさんが、自分の弾いてほしい曲をしっかり主張するようになりました。Sさんは「おうた」と要求するので、私は彼女が望む歌を予想して弾いています。Sさんはちょっと聴いて違うと私の腕をはらって、「（違う）おうた」と再度要求してきます。A君の場合は曲の出だしを歌うことで、Nさんの場合は「今度はミッキーお願いします」という具合です。

以前自分の好きな曲以外を弾くと泣きだしていたNさん、怒っていたA君は、逆に他の人の好きな歌も一緒に楽しむようになりました。子どもの心の中に自分を主張しようとする思いと、周りの人と折り合いをつけようとする思いが同居していることがよく解りました。

他の子の好きな歌を覚えて歌う

A君が「ミッキー・マーチ」を歌いだすとSさんが、「どこかで春が」を歌いだすとNさんが、まもなく姿を現します。それぞれ、ふたりが昔からよく口ずさんでいる歌です。A君はそれらを歌うことで、周りの人にふたりが来たことを伝えてくれます。A君の彼女たちに対する親しみも伝わってきます。Nさんもそれをおもしろいと思ったようで、A君を見ると「まつぼっくり」を歌うようになりました。

（愛育養護学校）